

夏目漱石「こころ」事前学習シート

Q この作品はなぜ章立てが一定で、なおかつ短いのか。

A 「この作品は朝日新聞に連載されたものである。新聞連載のために行数が一定となった。漱石の作品は新聞発表がほとんどである。」 「吾輩は猫である」・「坊っちゃん」はホトトギスに発表。

上 先生と私

一

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る《はば》かる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すことに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執《と》つても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字《かしらもじ》などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。

Q 1 「私」と「先生」との関係は一般的に何と呼ばれているか、それぞれの立場を書きなさい。

A 「先輩」と「後輩」の関係。(二人は旧制高等学校の第一高等学校の卒業生)

Q 2 「先生」という呼び名と、頭文字での呼び名の違いは何と「私」は考えているか、述べなさい。

A 「二人称のよびかけ語である「先生」の方が親愛の度合いが高く表現され、「K」のような頭文字は他人行儀な感じを与える。」(自分の親友を「K」という頭文字で呼んだ「先生」に対する「私」の批判も含まれる。)

三

次の日私は先生の後について海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁《ちよう》ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた。広い蒼《あお》い海の表面に浮いているものは、その近所に私たち二人より外になかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂った。先生はまたばかりと手足の運動を己《や》めて仰向けになつたまま浪《なみ》の上に寝た。私もその真似をした。青空の色がざらざらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

Q 「私」と「先生」は二人とも自然との一体感に喜びを感じているが、その姿勢は対照的に描かれている。その違いの意味するところを述べなさい。

A 「若い「私」は自分の筋力や体力を用いて巨大な力強い海に遊ぶのに「歓喜」を覚え、また孤独感を忘れるためにも躍り狂ったりしていた。一方「先生」は海面に身をゆだねることによって、日常の孤独と苦悩を忘れようとした。」「私」も真似をしたが、その気持ちかわからなかったので「愉快ですね」などと言った。」(1年で学習した高村光太郎「道程」では自然を父たとらえていた。)

五

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍《へん》繰り返した。その言葉は森閑《しんかん》とした屋の中《うち》に異様な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも心《こた》えられなくなった。

「私の後を眼《つ》けて来たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。けれどもその表情の中《うち》には判然《はっきり》いえないような一種の曇りがあつた。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰の墓へ参りに行ったか、妻《さい》がその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」

「そうですか。——そう、それはいうはずがありませんね、始めて会ったあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心《とくしん》したらしい様子であつた。しかし私にはその意味がまるで解《わか》らなかつた。

Q 1 「先生」はなぜ「どうして……」を二回も繰り返し、驚きを示したのか。その態度に至った「先生」の気持ちを書きなさい。

A 「「K」の死の原因を暴こうとする得体の知れないものに、追われているという妄想にとらわれていた。」

Q 2 その「先生」の態度を見て私はどのように考えたか、述べなさい。

A 「現在の「私」はそれが追跡妄想であつたことがわかっている。しかし当時の「私」はその理由がわからない。」

七

「私は淋《さび》しい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいますが、だからなぜそうたびたび来るのかと聞いて聞いたのです」

「そりゃまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかつた。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳《いくつ》ですか」といった。

この問答は私にとってすこぶる不得要領《ふとくようりよう》のものであつたが、私はその時底《そこ》まで押さずに帰ってしまった。しかもそれから四日と経《た》たないうちにまた先生を訪問した。先生は歴敷《れきふ》出るや否や笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といって自分も笑った。

私は外、《ほか》の人からこういわれたらきつと癢《しやく》に触《さわ》ったらうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であった。癢に触らないばかりでなくかえって愉快だった。

「私は淋しい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくっても年を取っているから、動かすにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打《ぶ》つかりたいのでしょうか……」

「私はちっとも淋しくはありません」

「若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅《うち》へ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会ってもおそらくまだ淋しい気がどこかでしていているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外の方を向いて今に手を広げなければならなくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなります」

先生はこういって淋しい笑い方をした。

Q 「先生」は自分に近づいてくる「私」のことをどのように思っていたのか。

A 「私」の「先生」に対する愛着を通して、「先生」は「私」の中に孤独感があるということを直感的に見抜いていた。当時はこの言葉を「私」は否定したが、実は真実を言い当てていたのである。そしてそのために自分に近づいてくることについて「先生」は自分が「引き上げる」力がないことを申し訳なく思っている。」

十二

「君は恋をした事がありますか」

私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかった。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、冷評《ひやか》しましたね。あの冷評《ひやか》のうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の聲が交《まじ》っていますよ」

「そんな風に聞こえませんか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもって暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解《わか》っていますか」

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった。

Q 冷やかした「私」の心の中に何があると「先生」は指摘したのか。

A 「嫉妬」という気持ち。(「私」の中の嫉妬心はあくまで無意識である。)

十三

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」

「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」

「恋に上《のぼ》る階段《かいだん》なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異《こと》にしているように思われます」

「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私は恋に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお思いになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起った事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかった。

「しかし気を付けなさいといけな。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」

Q 「私」が「先生」に近づく理由を何だと「先生」は考えているか、述べなさい。

A 「若い人が異性と交際する機会が非常に乏しい当時としては、同性から異性という「恋の階段」は普通の順序であった。「私」は自分の感情を意識してなかったので、「先生」は、「私」の恋への憧憬という無意識を意識化してあげた。」

十四

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺《あざむ》かれた返報に、残酷な復讐《ふくしゅう》をするようになるものだから」

「そりゃどうい意味ですか」

「かつてはその人の膝《ひざ》の前に跪《ひざまず》いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載《の》せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を床《しりぞ》けたいと思うのです。私は今より一層淋《さび》しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己《おの》れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

私はこういう覚悟をもっている先生に対して、いふべき言葉を知らなかった。

Q 「先生」はどのようなことを想定して、「私を信用してはいけませんよ」と言っているのか、述べなさい。

A 「「私」の自分に対する敬意を退け、その熱をさまそうとするために言った。「先生」のKに対する裏切りは、常にKの優越に支配されていることから起こった。そして弟子は師を乗り越えたことを証明するために、いずれ師を侮辱するようになる。このような危険性を想定しての発言である。」

二十八

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなものです。それから、君は今、君の親戚なその中に、これといって、悪い人間はいないようだとはいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型《いかた》に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」

Q なぜ「先生」は田舎の者の方が、都会の者に比べて悪いと言っているのか、述べなさい。

A 「田舎の方が、封建的な習慣に支配されていて、世間体などで自分の心を変化することが多い。一方都会は個人主義的感覚を持っている人が多く、他人に対してこだわりを持たないから。」

二十九

「さきほど先生のいわれた、人間は誰でもいざという間に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」

「意味といって、深い意味もありません。——つまり事実なんです。理屈じゃないんだ」

「事実で差支《さしつか》えありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」

先生は笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風に。

「金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」

私には先生の返事があまりに平凡過ぎて話《つま》らなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であった。私は登ましてさっさと歩き出した。いきおい先生は少し後《おく》れがちになった。先生はあとから

「おいおい」と声を掛けた。

「そら見たまえ」

「何をですか」

「君の気分だって、私の返事一つですぐ変わるじゃないか」

待ち合わせるために振り向いて立ち留《ど》まった私の顔を見て、先生はこういった。

Q 私の態度と悪人の態度の共通点は何か、述べなさい。

A 「欲望が満たされない時、もしくは満たそうとする時、急に態度を変えるという点。」（私の欲望とは、先生の返事がもっと意味深いものであるということに期待すること。）

三十一

「あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃないかと。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏《まと》め上げた考えをむやみに人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉《ことごと》くあなたの前に物語るなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」

「別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足はできないのです」

先生はあきれたといった風に、私の顔を見た。巻煙草《まきタバコ》を持っていたその手が少し顫《ふる》えた。

「あなたは大胆だ」

「ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」

「私の過去を許《あは》いてもらいますか」

「許くという言葉が、突然恐ろしい響きをもって、私の耳を打った。私は今私の前に坐っているのが、一人の罪人であって、不断から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼《あお》かった。」

「あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果で、人を疑《うたぐ》りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるよ。うだ。私は死ぬ前にたった一人で好《い》いから、他《ひと》を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれるか。なつてくれますか。あなたははらの底から真面目ですか」

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いった事も真面目です」

私の声は顫えた。

「よろしい」と先生がいった。「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れません。聞かない方が増《ま》し。かも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適当の時機が来なくつちや話さないんだから」

Q 「先生」の言う、真面目な人とはどのような人のことか、述べなさい。

A 「真面目な人とは、自分が信頼できる人ということ。」（人間不信に陥っていた「先生」は、誰か一人だけでも、

自分の信頼できる者に秘密を打ち明け、人間に対する信頼を回復し、孤独から脱出したいという強い願望をもって
いた。)

中 西親と私

「卒業ができてまあ結構だ」

父はこの言葉を何遍《なんべん》も繰り返した。私は心のうちでこの父の喜びと、卒業式のあった晩先生の家《うち》の食卓で、「お目出どう」といわれた時の先生の顔付とを比較した。私には口で祝ってくれながら、腹の底でけなしている先生の方が、それほどにもないものを珍しそうに嬉《うれ》しがる父よりも、かえって高尚に見えた。私ははしまいに父の無知から出る田舎臭いところに不快を感じ出した。

「大学ぐらい卒業したって、それほど結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だってあります」

私はついにこんな口の利《き》きようをした。すると父が変な顔をした。

「何も卒業したから結構とばかりいうんじゃない。そりゃ卒業は結構に違いないが、おれのいうのはもう少し意味があるんだ。それがお前に解《わか》っていてくれさえすれば……」

私は父からその後《あと》を聞こうとした。父は話したくなさそうであったが、どうとうこういった。

「つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月《みつき》か四月《よつき》ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういう仕合《しあわ》せか、今日までこうしている。起居《たちい》に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せつかく丹精《たんせい》した息子が、自分のいなくなった後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、高《たか》か《か》が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だといわれるのは、余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。解ったかい」

私は一言《いちごん》もなかった。詫《あや》まる以上に恐縮して俯向《うつむ》いていた。

Q 1 父は「私」の態度にどのような無意識の気持ちを感じ取ったか。

A 「父は、「私」が学歴というものに価値を置かないという、無意識のエゴイズムを持っていることを感じ取った。」

Q 2 なぜ「私」は父の言葉に反論することなくうつむいたのか。

A 「父の虚栄心の背後に息子に対する愛情を見たから。」

五

崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「ああ、ああ」と云った。

「ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……」

父はその後を云わなかった。

Q 「己も」と言った父の気持ちを述べなさい。

A 「絶句の中に自分の死期を予感した。」

八

私は出来るだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐って、心細そうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返して眺めた。私はその時又蝉の声を聞いた。その声はこの間聞いたのと違って、つくつく法師の声であった。私は夏郷里に帰って、着え付くような蝉の声の中にじつと坐っていると、急に悲しい心持になる事がしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底にしみ込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かず、一人で一人を見つめていた。

私の哀愁はこの夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蝉の声がつくつく法師の声に変わる如くに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思われた。

Q 蝉の鳴き声を聞いたとき、「私」は何を感じたのか。わかりやすく説明しなさい。

A 「悠久の自然と比べたときの生物や人間の命のはかなさ。」(父の死を間近に感じていることや、「先生」から遠く離れていることによって強められた。)

十二

乃木大将の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知った。

「大変だ大変だ」といった。

何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。

「あの時はいよいよ頭が変になったのかと思って、ひやりとした」と後で兄が私にいった。「私も実は驚きました」と妹の夫も同感らしい言葉つきであった。

その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりであった。私は父の枕元に坐って鄭重《ていねい》にそれを読んだ。読む時間のない時は、そっと自分の室《へや》へ持って来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女《かんじよ》みたような服装《なり》をしたその夫人の姿を忘れる事ができなかった。

Q 乃木大将は何のために死んだのか。

A 「明治天皇に対する殉死」のため。(明治という時代が終わったことを表す。)